

# 植物医師

郷土喜劇

宮沢賢治

青空文庫



時 一九二〇年代

処 盛岡市郊外

人物

爾薩待にさつたい正ただし

ペンキ屋とてい徒弟

開業したての植物医師

農民 一

農民 二

農民 三

農民 四

農民 五

農民 六

幕あく。

粗末なバラック室、卓子二、一は顕微鏡を載せ一は客用、椅子二、爾薩待正 椅子に坐り心配そうに新聞を見て居る。立つてそわそわそこらを直したりする。

「今日なあ。」

「はあい。」（爾薩待忙しく身づくろいする）

（ペンキ屋徒弟登場 看板を携たずさえる）

爾薩待「ああ、君か、出来たね。」

ペンキ屋（汗を拭きながら渡す）「あの、五円三十銭でございま

す。」

爾薩待「ああ、そうか。ずいぶん急がして済まなかつたね。何せ今日から開業で、新聞にも広告したもんだからね。」

ペンキ屋「はあ、それでようございませうか。」

爾薩待「ああ、いいとも、立派にできた。あのね、お金は月末まで待つて呉れ給え。」

ペンキ屋「あのう、実はどちらさまにも現金に願つてございませうので。」

爾薩待「いや、それはそうだろう。けれどもね、ぼくも茲こゝでこうやって医者を開業してみれば、別に夜逃げをする訳でもないんだから、月末まで待つてくれたまえ。」

ペンキ屋「ええ、ですけれど、そう言いつかつて来たんですから」。

爾薩待「まあ、いいさ。僕だつて、とにかくこうやつて病院をはじめれば、まあ、院長じゃないか。五円いくらぐらいきつと払うよ。そうしてくれ給え。」

ペンキ屋「だつて、病院だつて、人の病院でもないんでしよう。」  
爾薩待「勿論もちろんさ。植物病院さ。いまはもう外国ならどこの町だつて植物病院はあるさ。ここではぼくがはじめだけれど。」  
ペンキ屋「だつて現金でないと私帰つて叱しかられますから。そんなら代金引替ということにねがいます。」

(すばやく看板を奪う)

爾薩待「君、君、そう頑固なこと言うんじゃないよ。実は僕も困つてるんだ。先月まではぼくは県庁の耕地整理の方へ出てたんだ。ところが部長と喧嘩けんかしてね、そいつをぶんなくつてやめてしまったんだ。商売をやるたつて金もないしね、やつとその顕微鏡を友だちから借りてこの商売をはじめたんだ。同情してくれ給え。」

ペンキ屋「だって、そんな先月まで交通整理だかやっていて俄にわかに医者なんかできるんですか。」

爾薩待「交通整理じゃないよ。耕地整理だよ。けれどもそりあ、医者とはちがわあね。しかしね、百姓のことなんざ何とでもごまかせるもんだよ。ぼく、きつとうまくやるから、ま

あ置いとけよ。置いとけよ。」

(また取り返す)

ペンキ屋「そうですか。せいじや月末にはどうか間ちがいなく。

困つちまうなあ。」

爾薩待「大丈夫さ。君を困らしあしないよ。ありがとう、じや、

さよなら。」

ペンキ屋徒弟退場。

「申し。」

爾薩待(居座いずまいを直しみづくろ身繕みづくろいする)「はあ。」

農民一(登場 枯れた陸稻おかぼをもっている)「稻の伯樂ばくろうづのあ、

こつちだべすか。」

爾薩待 「はあ、そうです。」

農民一 「陸稲のごとでもわかるべすか。」

爾薩待 「ああ、わかります。私は植物一切の医者ですから。」

農民一 「はあ、おりやの陸稲あ、さっぱりおがらないです。この位になって、だんだん枯れはじめです、なじよにしたらいいが、教えてくなんせ。」（出す）

爾薩待 （手にとって見る） 「ははあ、あんまり乾き過ぎたな。」

農民一 「いいえ、おりやのあそごあひでえ谷地やじで、なんぼ早ひでりでも

土ぼさぼさづくなるづごとのないどごだます。」

爾薩待 「ははあ、あんまり水のはけないためだ。」

農民一（考える） 「すた、去年なも、ずいぶん雨降りだたんとも、

ずいぶんゆぐ穫れだます、まんつ、おらあたりでば大谷地おおやぢ中うちでおれのこれあとつたもの無いがつつたます。」

爾薩待「ははあ、あんまり厚く蒔まきすぎたな。」

農民一「厚く蒔まぐて全体陸稲づもな、一いつたんぶ反歩はんぷさなんぼごりや蒔まげばいのす。」

爾薩待「さうですな。品種どじょうや土壤どじょうによりますがなあ、さうですなあ、陸稲一反歩となるという、可成いろいろですがなあ、その塩水撰せんしたやつとしないやつでもちがいますがなあ。」

農民一「はあ、その塩水撰せんしたのです。」

爾薩待「ははあ、塩水撰せんした陸稲たねの種子たねと、土壤や肥料にもより

ますがなあ。」

農民一 「まんつ、あだり前のどごで、あだり前の肥料してす。」

爾薩待 「そうですねあ、それは、ええと、あなたのあたりではな  
んぼぐらい播まきますか？」

農民一 「まず一反歩四升だなす。おらもその位に播いだんす。」

爾薩待 「ははあ、一反歩四升と。少し厚いようすなあ、三升八  
合ぐらいでしょうな。然し、あなたのとこのは厚蒔のため  
でもないすなあ。そうすると、やっぱり肥料すなあ。肥  
料があんまり少かつたのでしよう。」

農民一 「はあ、まあんつ、人並よりは、やったます。百刈りでは、  
まずおらあだり一反四畝せなんだ、その百刈りさ、馬うまごえ肥、

十五駄だん、豆粕まめかす一俵、硫安りゅうあん十貫目もやったます。」

爾薩待「あ、その硫安だ。硫安を濃くして掛けたでしょう。」

農民一「はあ、別段濃いと思わなかったが、全体なんぼ位に薄めたらいがべす。」

爾薩待「そうですね。硫安の薄め方となるとずいぶん色々ですがなあ、天気にもよりますしね。」

農民一「曇つてまず、土のさつと湿けだすぎたら、なんぼこりやにすたらいがべす。」

爾薩待「そうですね。またあんまり薄くてもいかなですな。あなたの処ではどれ位にします。」

農民一「まず肥桶こえおけ一杯の水さ、この位までで言うます。」

爾薩待 「ええ、まあそうですね、けれども、これ位では少し多い  
 かも知れませんね。まあ、こんなんでしような。」（掌を  
 少し小さくする）

農民一 「はあ、せどなはおれあは、もつと入れだます。」

爾薩待 「そうですか。そうすればまあ病気ですな。」

農民一 「何病だべす。」

爾薩待（勿<sup>もつたい</sup>体らしく顕微鏡に掛ける）「ははあ、  
 立枯病<sup>たちかれびょう</sup>で

すな。立枯病です。ちやんと見えています。立枯病です。」

農民一 「はでな、病気よりも何が虫だないがべすか。」

爾薩待 「虫もいますか。葉にですか。」

農民一 「いいえ、根にす、小せあ虫こあ居るようだます。」

爾薩待 「ああなるほど虫だ。ちゃんと根を食ったあとがある。これは病氣と虫と両方です。主に虫の方です。」

農民一 「はあ、私もそうだと思つてあんすた。」

爾薩待 (汗を拭<sup>ふ</sup>いてやつと安心という風) 「ええ、そうですね、これはもう明らかに虫です。しかも根切虫だということは極めて明白です。つまりこの稲は根切虫の害によつて枯れたのですな。」

農民一 「はあ、それで、その根切虫、無くするになじよにすたらいがべす。」

爾薩待 「さうですなあ、虫を殺すとすればやつぱり亜砒酸<sup>あひさん</sup>などが一番いいですな。」

農民一「はあ、どこで売ってるべす。」

爾薩待「いや、それは私のところが病院ですからな。私のところにあります。いま上げます。」

農民一「はあ。」

爾薩待（立つて薬瓶くすりびんをとる）「何反といいましたですか。」

農民一「五畝歩でござんす。」

爾薩待「五畝歩とするとどれ位でいいかなあ。（しばらく考えて）なあにくそという風）これ位でいいな。」（瓶のまま渡す）

農民一「あの虫のいないどごさも掛げるのすか。」

爾薩待（あわてる）「いや、それは、いたとこへだけかけるのです。」

農民一「枯れだどごあ半分ごりやだんす。」

爾薩待「ああ、丁度その位へかけるだけです。」

農民一「水さなんぼごりや入れるのす。」

爾薩待「肥桶一つへまずこれ位ですなあ。」

農民一「はあ、そうせば、よつほど町ねいに掛げないやないな。

まんつお有難うごあんすな。すぐ行つて掛げで見らんす。

なんぼ上げだらいがべす。」

爾薩待「そうですね。診察料一円に薬価一円と、二円いただきま  
す。」

農民一「はあ。」（財布から二円出す）

爾薩待（受取る）「やあ、ありがとう。」

農民一 「どうもお有難うごあんした。これながらもどうがよろしく  
お願いいだしあんす。」

爾薩待 「いや、さよなら。」（農民一 退場）

爾薩待 （ほくほくして室の中を往来する） 「ふん。亜硫酸は五十  
銭で一円五十銭もうけだ。これなら一向訳ないな。向こう  
から聞いた上でこっちは解決をつけてやる丈だから。」

（硫酸を入れるときの手付をする）

「もうし。」

爾薩待 「はい。」（農民二 登場）

農民二 「植物医者づのあお前さんだべすか。」

爾薩待 「ええ、そうです。」

農民二「陸稻おかほのごとでもわがるべすか。」

爾薩待「ああわかります。私は植物一切の医者ですから。」

農民二「はあ、おりやの陸稻あ、さっぱりおがらないです。この位になってだんだん枯れはじめです。」

爾薩待「ああ、そうですね。まあお掛けなさい。ええと、陸稻が枯れるんですか。」

農民二「はあ、斯こう言うにならんす。」（出す）

爾薩待「ああ、なるほど、これはね、こいつはね、あんまり乾き過ぎたという訳でもない、また水はけの悪いためでもない。」

農民二「はあ、全ぐその通りだんす。」

爾薩待 「そうでしよう。またあんまり厚く蒔き過ぎたといふのもない。まあ一反歩四升位蒔まいたでしよう。」

農民二 「そうでござんす、そうでござんす、丁度それ位蒔ぎあんですた。」

爾薩待 「そうでしよう。また肥料があんまり少ないのでもない。

また硫酸を追肥ついでひするのに濃過こすぎたのでもない。まあ肥桶こえおけ一つにこれ位入れたでしよう。」

農民二 「はあ、そうでござんす、そうでござんす。」

爾薩待 「そうでしよう、またこれは病気でもない。ぼく考えるに、  
どうです、これ位ぐらいのこんな虫が根についちやいませ  
んか。」

農民二「はあ、おりあんす、おりあんす。」

爾薩待「なるほど、そうでしょう。そいつがいかんです。」

農民二「なじよにすたらいがべす。」

爾薩待「それはね、あひさん亜砒酸という薬をかけるんです。」

農民二「どごで売ってべす。」

爾薩待「いや、勿論私のところにあるのですがね、いまちよつと切れていますから、証明書を書いて上げます。(書く)これをもって町の薬屋から買っておいでなさい。硫酸と同じ位に薄めて使うんです。」

農民二「はあ、こいづ持ってて薬買って薄めで掛けるのだなす。」  
爾薩待「そうです。」

農民二「なんぼお礼上げだらいがべす。」

爾薩待「診察料は一円です。それから証明書代が五十銭です。」

農民二「一円五十銭だなす。（金を出す）さあ、どうもおお礼が  
どごあんすた。」

爾薩待「いや、ありがとう。さよなら。」

農民二 退場

農民三 登場

農民三「今朝新聞さ広告出はてら植物医者づのあ、お前さんだべ  
すか。」

爾薩待「ああ、そうです。何かご用ですか。」

農民三「おれあの陸稲あ、さつぱりおがらないです。」

爾薩待「ええ、ええ、それはね、疾とうから私は気が付いていまし  
たが、針金虫の害です。」

農民三「なじよにすたらいがべす。」

爾薩待「それはね、あひさん亜硫酸を掛けるんです。いま私が証明書を書  
いてあげますから、これを持って薬店へ行つて亜硫酸を買  
つて肥桶一つにこれ位ぐらい入れて稲にかけるんです。」

(証明書を書く、渡す)

農民三「はあ、そうですか。おありがどごあんす。なんぼ上げ申  
したらいがべす。」

爾薩待「一円五十銭です。」

(金を出す)

農民三「どうもおおりがどごあんすた。」

爾薩待「いや、ありがとう。さよなら。」(農民三 退場)

農民四、五 登場。

爾薩待「いや、今日は、私は植物医師、爾薩待にさつたいです。あなた方

は陸稲の枯れたことに就ついて相談においでになったのでし

よう。それは針金虫の害です。亜砒酸をおかけなさい。い

ま証明書を書いてあげます。」(書く)

農民四、五(驚きょうたん 嘆たんす)この人あ医者ばかりだない。八卦はっけも置

ぐようだじや。」

爾薩待「ここに証明書がありますからね、こいつをもって薬屋へ

行つて亜硫酸を買つて、水へかして稲に掛けるんです。

ええと、お二人で三円下さい。」

農民四、五「どうもおおりがどごあんすた。」

爾薩待「ええ、さよなら。」

農民六 登場。

爾薩待「ああ、（証明書を書く）この証明書を持つて薬屋へ行つて亜硫酸を買つて水へかしてあなたの陸稲へおかけなさい。すっかり直りますから。その代り一円五十銭置いてつて下さい。」

農民六（おじぎ、金を渡す。去る）

爾薩待（独語）「どうだ。開業早々そうそうからこううまく行くとは思

わなかつたなあ。半日で十円になる。看板代などはなんでもない。もう七人目のやつが来そうなものだがああ。」

「今日は。」

「はい。」（農民一 登場）

爾薩待 「いや、今日は。私は植物医師の爾薩待です。あなたの陸稲はすっかり枯れたでしょう。」

農民一 「はあ。」

爾薩待 「それはね、あんまり乾き過ぎたためでもない、あんまり湿り過ぎたためでもない。厚く蒔きすぎたためでもない。まあ一反歩四升ぐらい播いたのでしょう。」

農民一 「はあ。」

爾薩待 「それでいいのです。また肥料のあまり少ないのでもない。硫酸を濃くしてかけたのでもない。肥桶一つへこれ位入れたでしょう。」

農民一 「はあ。」

爾薩待 「そこでね、それは針金虫というものの害なのです。それをなくするには亜硫酸を水にとかしてかけるのです。」

農民一 「はあ、私そうしあんした。」

爾薩待 (顔を見て愕く)<sup>おどろ</sup> 「おや、あなたはさつきの方ですね。こついは失敬しました。どうでした。」

農民一 「どうも、ゆぐないよだんすじや。かげだれば、稲見でるうちに赤くなつてしまつたもす。」

爾薩待（あわてる）「いや、そんな筈はありません。それは掛けようが悪いのです。」

農民一「掛けよう悪たてお前さんの言うようにすたます。」

爾薩待「いや、そうでないです。第一、日中に掛けるといふことがありませんか。」

農民一「はでな、そいづお前さん言わないんだもな。」

爾薩待「言わないたつて知れてるじゃありませんか。いやになつちまうな。」

「申し。」（農民二 登場）

農民二「陸稻おかほさつぱり枯れでしまつたます。」

爾薩待「だからね、今も言つてるんだ、こんな天氣のまつ盛りに

肥料にしる薬剤にしろかけるといふ筈はないんだ。」

農民二「何したどす。お前さん、今行つてすぐ掛げろつて言つた  
けあか。」

爾薩待「それは言つた。言つたけれども、君たちのやつたよう  
でなく、噴霧器ふんむきを使わないといけないんだ。」

農民一「虫も死ぬ位だから陸稲さも悪いのでああるまいが。」

農民二「どうもそうだようだます。」

爾薩待「いや、そんなことはない。ちゃんと処しよほう方通りやればう  
まく行つたんだ。」

「今日は。」（農民三 登場）

農民三「先生、あの薬わがない。さっぱり稲枯れるもの。」

爾薩待 「いや、それはね、今も言つてたんだが、噴霧器を使わずに、この日中やったのがいけなかつたのだ。」

農民三 「はあでな、お前さま、おれさ町ていねいに柄杓ひしやくでかげろて言つただないすか。」

爾薩待 「いやいや、それはね、……」

農民二 「なあに、この人、まるでさつきたがら、いいこりや加減だもさ。」

農民一 「あんまり出来さないよだね。」

(医師しおれる)

農民四、五、六 登場

農民四 「じゃ、この野郎やろう、山師たがりだじやい。まるきり稲枯れ

でしまたな。」

農民五 「ひでやづだじゃ。春から汗水たらすて、ようやぐ物にすたの、二百刈りづもの、まるつきり枯らしてしまつたな。」

農民六 「ほんとにひで野郎だ。」

農民二 「全体、はじめの話がら、ひよんただたもな。じゃ、うな、医者だなんて、人がら銭まで取つてで、人の稲枯らして済むもんだが。」

爾薩待（うなだれる）

（農民等 默然もくねん）

農民二（ややあつて） 「いま、もぐり齒医者でも 懲ちようえき 役やく になるもの、人欺だまして、こつたなごとしてそれで通るづ筈ないが

べじや。」

爾薩待（いよいよよしよげる。）

農民二「六人さ、まるつきり同じごと言つて偽うそこいで、そしてで  
威張つて、診察料よごせだ、全体、何の話だりや。」

爾薩待（いよいよよしおれる）

農民一（気の毒になる）「じや、あんまりそう言うなじや、人の  
医者だて治るごともあれば、療治お後れば死ぬごともある  
だ。あんまりそう言うなじや。」

農民三「まあんつ、運悪がたとあぎらめないやないな。ひでりさ  
一年かがたど思たらいがべ。」

農民四「全体、みんな同じ陸稲だったから悪がったもな。ほがの

ものもあれば、治る人もあつたんだとも。あつはつは。」

農民五「さあ、あべじゃ。医者さんもあんまり、がおれないで、

せっかく折角みつしりやつたらいがべ。」

農民六「ようし、仕方ないがべ。さあ、さつぱりどあぎらめべ。

じゃ、医者さん、まだ頼む人もあるだ、あんまり、がおらないでおであれ。」

農民二「さあ、行くべ。どうもおおりがどごあんすた。」

一同退場 医師これを見送る。

(幕)





# 青空文庫情報

底本：「銀河鉄道の夜」新潮文庫、新潮社

1961（昭和36）年7月30日発行

1979（昭和54）年6月5日40刷

入力：蔣龍

校正：土屋隆

2004年7月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

# 植物医師

## 郷土喜劇

2020年 7月13日 初版

### 奥付

発行 青空文庫  
著者 宮沢賢治  
URL <http://www.aozora.gr.jp/>  
E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)  
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU  
URL <http://aozora.xisang.top/>  
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

#### Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>